

平成19年度病害虫発生予報第4号

平成19年6月7日
鳥取県病害虫防除所

予報の概要

区分	農作物名	病害虫名	発生時期	予想発生量
普通作物	イネ	いもち病(葉いもち) 縞葉枯病(ヒメトビウンカ) ニカメイガ(第1世代) イネミズゾウムシ	平年並 やや早い やや早い -	平年並 少ない 少ない 少ない
果樹	ナシ	黒斑病 黒星病 輪紋病 アブラムシ類 ニセナシサビダニ	平年並 平年並 平年並 - やや遅い	平年並 平年並 平年並 やや多い 平年並
		カキ	落葉病 カキノヘタムシガ	平年並 平年並
	ブドウ		べと病 チャノキイロアザミウマ ハマキムシ類	平年並 平年並 平年並
		リンゴ	ハダニ類	平年並
	野菜	スイカ、メロン	つる枯病、炭疽病 うどんこ病 アブラムシ類 ハダニ類	平年並 平年並 平年並 平年並
イチゴ			うどんこ病 炭疽病 アブラムシ類 ハダニ類	平年並 平年並 平年並 平年並
		ネギ	さび病 黒斑病 ネギハモグリバエ ネギアザミウマ	平年並 平年並 平年並 やや早い
ブロッコリー			コナガ	平年並
シバ		葉腐病(ラージパッチ)	平年並	平年並

[参考]

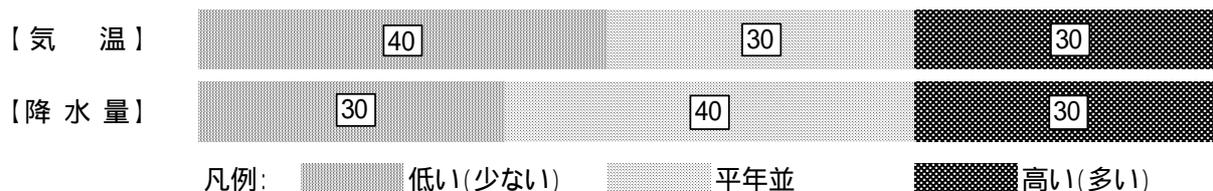
気象予報(抜粋)

1か月予報(予報期間:6月2日~7月1日、6月1日 広島地方気象台発表)

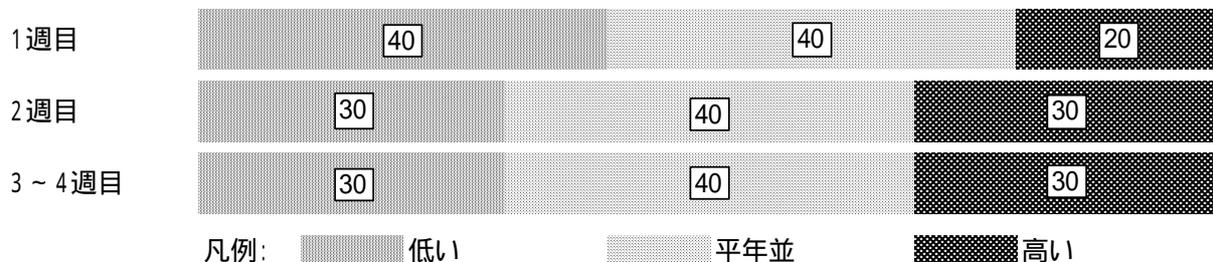
向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と特徴のある気温、降水量の確率は以下のとおりです。

平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。

< 向こう1か月の気温、降水量の各階級の確率(%) >



< 気温経過の各階級の確率(%) >



普通作物

[イネ]

1 いもち病(葉いもち)

(1) 予報の内容

発生地域 県下全域
発生時期 平年並
発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 昨年の穂いもちの発生は少なかったことから、種子の保菌率も低いと予想される。また、現地においても苗いもちの発生は確認されていない。

イ 向こう1か月の気象予報によると、発生にやや助長的であると見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 移植後は、ほ場をよく観察して早期発見に努め、急性病斑がみられたときは、防除指針などを参考に直ちに防除を行う。

イ コシヒカリ、ひとめぼれ等の本病に弱い品種、多肥、遅植え等の条件では特に発生しやすいので注意する。

ウ 補植用苗が本病の発生源となることが多いので、補植が終わったら放置せず、早めの処分を徹底する。

2 縞葉枯病(ヒメトビウンカ)

(1) 予報の内容

発生地域 県下全域
発生時期 やや早い
発生量 少ない

(2) 予報の根拠

ア 向こう1か月の気象予報によると、第2世代幼虫のふ化最盛期は平年よりやや早い6月下旬頃になると予想される。

イ 昨年の本病の発生量は少なかった。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 縞葉枯病の常発地で、育苗箱施用剤を使用していない場合には、第2世代幼虫のふ化最盛期(6月下旬頃)に防除指針などを参考にして、粉剤や粒剤などを散布する。

イ 本虫はイネの葉色が濃いほ場に発生しやすいので、窒素過多にならないようにする。

3 ニカメイガ(第1世代)

(1) 予報の内容

発生地域	県下全域
発生時期	やや早い
発生量	少ない

(2) 予報の根拠

ア 予察灯における初飛来日は平年に比べてやや早く、向こう1か月の気象予報によると、発蛾最盛期は平年よりやや早い6月上旬頃になると予想される。

イ 5月第5半旬までの予察灯及びフェロモントラップへの総誘殺数は、平年に比べて少ない。

(3) 防除上注意すべき事項

ニカメイガに登録のある育苗箱施用剤を使用していないほ場では、6月中旬頃における葉鞘変色茎率が5%以上になった場合に、防除指針などを参考にして防除を行う。

4 イネミズゾウムシ

(1) 予報の内容

発生地域	県下全域
発生量	少ない

(2) 予報の根拠

ア 5月第5半旬までの予察灯への総誘殺数は、平年に比べて少ない。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 移植期の防除を行っていないほ場では防除を行う。また、移植期の防除を行っても成虫の寄生数及び食害が多いほ場では防除を行う。なお、防除薬剤等については、防除指針などを参考にする。

イ 本虫の要防除水準は成虫寄生密度0.5頭/株である。

果 樹

[ナ シ]

1 黒斑病

(1) 予報の内容

発生時期	平年並
発生量	平年並

(2) 予報の根拠

ア 県予察ほ場(北栄町)における5月下旬の孢子飛散数は、平年並であった。

イ 5月下旬現在、幼葉や幼果などで本病の発生が一部に認められる。

ウ 向こう1か月の気象予報によると、黒斑病の発生は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 6月になると新梢葉が多くなり、薬液の付着むらが出やすいので、新梢の先端まで薬液が十分かかるよう注意する。
- イ 薬剤はジラム・チウラムフロアブル（ダイボルト又はパルノックス）500倍とポリオキシシリンAL水和剤1,500倍の混用液、アントラコール顆粒水和剤500倍液などを使用する。
- ウ 園内の風通しをよくするため、下草の管理を徹底する。

2 黒星病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並
発生量 平年並

(2) 予報の根拠

- ア 県予察ほ場（北栄町）における5月下旬の孢子飛散数は、平年を下回った。
- イ 5月下旬現在、赤ナシの幼葉や幼果などで本病の発生が一部に認められる。
- ウ 向こう1か月の気象予報によると、黒星病の発生は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 発病した葉や幼果は取り除き、園外に持ち出し処分する。
- イ 赤ナシの有袋栽培を行っているところでは、袋掛け直前に必ず薬剤散布を行って袋掛けを行う。
- ウ 薬剤はアントラコール顆粒水和剤500倍液、ベルコートフロアブル1,500倍液などを使用する。

3 輪紋病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並
発生量 平年並

(2) 予報の根拠

- ア 伝染源となるいぼ病斑の発生の多い園が一部で認められる。
- イ 向こう1か月の気象予報によると、輪紋病の発生は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 果実の発病は袋掛けで防げるが、袋掛けが遅れると発生が増加するので、摘果が終わり次第、早めに袋掛けを行う。
- イ 果実および枝の発病を抑えるため、梅雨期の薬剤散布を徹底する。
- ウ 薬剤はベルコートフロアブル1,500倍液、オキシラン水和剤600倍液などを使用する。

4 アブラムシ類

(1) 予報の内容

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

- ア 6月第1半旬現在、県予察ほ場（北栄町）におけるワタアブラムシの平均寄生新梢率は6.3%（平年：13.0%）であり、平年に比べてやや少ない発生となっている。
- イ 5月28～29日の定点巡回調査の結果、アブラムシ類の発生量は平年並であった。
- ウ 向こう1か月の気象予報によると、アブラムシ類の発生にやや好適である。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 発生が多いほ場では、アドマイヤーフロアブル5,000倍液などを散布する。

イ アドマイヤーは、連用による薬剤抵抗性の発達を避けるため、それぞれ年1回限りの使用とする。

5 ニセナシサビダニ

(1) 予報の内容

発生時期 やや遅い

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア ニセナシサビダニの初発生は、平年並の5月上旬に認められた。

イ 6月上旬現在、県予察ほ場(北栄町)におけるニセナシサビダニの新梢先端葉1枚当たりの寄生虫数は、191.0頭(平年:777.9頭)であり、平年よりやや少ない発生となっている。

ウ 新梢先端葉には多数の産卵が認められており、今後、密度が増加すると予想される。

エ 向こう1か月の気象予報によると、発生盛期はやや遅い6月下旬~7月上旬が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 防除時期は6月中旬頃を目安とする。

イ 薬剤は、ハチハチフロアブル2,000倍液などを使用し、徒長枝先端葉に薬液が十分付着するように散布する。

[カ キ]

1 落葉病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 近年、本病の発生は少なく、越冬菌密度は低いものと見込まれる。

イ 本病は連続降雨により発病が助長される。

ウ 向こう1か月の気象予報によると、本病の発生は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

薬剤は、落花始め~生理落果期に、有機銅フロアブル1,000倍液、マンゼブ水和剤(ジマンダイセン又はペンコゼブ)600倍液などを10日間隔でそれぞれ1回ずつ散布する。

2 カキノヘタムシガ

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 越冬量は平年並と見込まれる。

イ 向こう1か月の気象予報によると、成虫の発生最盛期は平年並の6月上旬頃と見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

落葉病の防除時期に合わせてパダンSG水溶剤1,500倍液などを散布する。なお、パダンSG水溶剤は、開花後に発生するチャノキロアザミウマにも効果がある。

[ブドウ]

1 ベと病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 本病は連続降雨により発病が助長され、施設栽培ではハウスの谷部など雨に当たりやすい場所での発生が多い。

イ 向こう1か月の気象予報によると、本病の発生は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 果粒が大豆大以上になると薬剤散布によって果粉が溶脱するので、果粒が小豆大までにアミスター10フロアブル1,000倍液又はストロビードライフフロアブル2,000倍液などを新梢先端や副梢に十分量散布する。

イ 本病の発生が多い園では、薬剤が果房に直接かからないように注意して、ホライズンドライフフロアブル2,500倍液を散布する。

2 チャノキロアザミウマ

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 5月下旬現在、県予察ほ場(北栄町)の黄色粘着トラップによるチャノキロアザミウマの誘殺数は平年並である。

イ 向こう1か月の気象予報によると、発生が増加する時期は、平年並の6月上旬頃と見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

例年発生の多い園では、モスピラン水溶剤4,000倍液、バリアード顆粒水和剤4,000倍液などを6月上旬から中旬に必ず散布する。ただし、果実に直接かかると果粉が溶脱する恐れがあるため、果房にかからないようにする。

3 ハマキムシ類(チャノココクモンハマキ)

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 5月下旬現在、県予察ほ場(北栄町)の性フェロモントラップによるチャノココクモンハマキの誘殺数は平年並である。

イ 向こう1か月の気象予報によると、平年並の7月上旬頃からふ化幼虫の発生が増加すると見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

防風樹のサンゴジュは発生源になるので、防風樹での発生に注意する。

[リンゴ]

1 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 県予察ほ場（北栄町）における6月上旬のハダニ類の発生量は平年並となっている。

イ 向こう1か月の気象予報によると、ハダニ類の発生にやや好適である。

(3) 防除上注意すべき事項

ハダニの発生が認められた場合は、ニッソラン水和剤2,000倍液などを散布する。

野 菜

[スイカ、メロン]

1 つる枯病、炭疽病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 5月下旬現在、現地ほ場における本病の発生はやや少ない。

イ 本病は降雨によって発病が助長される。向こう1か月の気象予報によると、今後平年並の発生が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

ア トンネル内が過湿にならないように換気を行う。

イ 雨滴のあたる箇所又は株元から発病するので、トンネル栽培のスイカの茎葉には雨がなるべくあたらないようにトンネルの開閉を行う。また、薬剤散布は株元にも薬液がよくかかるように丁寧に行う。

ウ 雨の日が続くと発病が増加するので、散布間隔を短くし、雨のやみ間に防除する。

エ 薬剤は、ジマンダイセン水和剤400～600倍液などを散布する。スイカではアントラコール顆粒水和剤400～600倍、ダコニール1000の700倍液などを散布してもよい。

2 うどんこ病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 5月下旬現在、現地ほ場において本病の発生が散見される。

イ 本病は、25 前後の気温と乾燥条件で発病が助長される。向こう1か月の気象予報によると、今後平年並の発生が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

ア すでに発病のみられるほ場では、トリフミン水和剤3,000～5,000倍

液などを散布する。

イ つる枯病も発生している場合には、スイカではポリベリン水和剤 1,000 ~ 2,000 倍液、メロンではポリベリン水和剤 1,500 ~ 2,000 倍液などを散布する。

3 アブラムシ類

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 県予察ほ場（北栄町）に設置した、黄色水盤における 5 月下旬までの有翅アブラムシ類の誘殺数は平年並である。

イ 現地のスイカほ場における発生量は平年並である。

ウ 向こう 1 か月の気象予報によると、今後も平年並の発生量が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

ア ハウスの換気部分や出入口には寒冷紗被覆を行い、アブラムシ類の侵入防止に努める。

イ 薬剤は、DDVP 乳剤 1,000 ~ 2,000 倍液、アドマイヤー水和剤 2,000 倍液などを散布する。スイカのハウス栽培で収穫間近なものは、ハチハチ乳剤の 1,000 ~ 2,000 倍液、マラバッサ乳剤 1,500 ~ 2,000 倍液などを散布する。

4 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 5 月下旬現在、県予察ほ場（北栄町）における本虫の発生は平年並である。

イ 現地スイカほ場における発生量は、平年並である。

ウ 向こう 1 か月の気象予報によると、今後も平年並の発生量が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

発生初期にはニッソラン V 乳剤の 1,000 倍液、バロックフロアブル 2,000 倍液などを散布する。発生がやや多い場合は、カネマイトフロアブル 1,000 ~ 1,500 倍液、コロマイト乳剤 1,000 倍液などを散布する。なお、コロマイト乳剤は薬害が生じやすいので、他の薬剤との混用散布は避ける。

[イチゴ]

1 うどんこ病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 5 月下旬現在、定点調査ほ場における育苗床での本病の発生はやや多い。

イ 向こう 1 か月の気象予報によると、今後、平年に比べてやや多い発生が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 本ばに病原菌を持ち込まないために、育苗期間中の防除を徹底する。
- イ 防除にあたっては、葉裏へも薬剤が付着するように丁寧に散布を行い、発病初期までは、ベルコート水和剤1,000倍液などを散布する。
- ウ すでに発病している場合には、カリグリーンの800~1,000倍液と、バイコラール水和剤又はトリフミン水和剤の5,000倍液を混用散布する。
なお、炭疽病も発生している場合には、アミスター20フロアブル1,500~2,000倍液などを散布してもよい。

2 炭疽病

(1) 予報の内容

発生時期	平年並
発生量	平年並

(2) 予報の根拠

- ア 5月下旬現在、定点調査ほ場の育苗床での本病の発生はほとんどみられない。
- イ 本病は高温多湿条件で発病が助長される。向こう1か月の気象予報によると、今後平年並の発生が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 育苗期間中、章姫などの罹病性品種については薬剤を定期的に散布する。発病した株の薬剤防除は困難であるため、予防防除を徹底する。薬剤散布にあたってはクラウン部分、葉柄、托葉、ランナーにもよくかかるように丁寧に散布する。
- イ 下葉かきによる傷口、ランナーの切り口などからも感染するので、下葉かきの直後にも薬剤散布を行う。
- ウ 育苗初期の薬剤は、アミスター20フロアブル2,000倍液、ゲッター水和剤1,000倍液またはバイコラール水和剤2,500倍液などを散布する。
なお、アミスター20フロアブルには展着剤を加用しない。
- エ 育苗中~後期の薬剤は、アントラコール顆粒水和剤500倍液、ジマンダイセン水和剤600倍液、ベルコート水和剤1,000倍液などを用いて、7~10日間隔で予防散布する。
- オ 仮植床は排水良好な無病地を選ぶ。
- カ 本病は露地育苗における降雨や強い頭上灌水によって発病が増加するため、雨よけ育苗を励行し、頭上灌水を避けて底面給水を行う。

3 アブラムシ類

(1) 予報の内容

発生時期	平年並
発生量	平年並

(2) 予報の根拠

- ア 県予察ほ場(北栄町)に設置した、黄色水盤における5月下旬までの有翅アブラムシ類の飛来量は平年並である。
- イ 現地のイチゴ育苗床における発生量は平年並であるが、一部で発生量の多いほ場が見受けられる。
- ウ 向こう1か月の気象予報によると、今後も平年並の発生量が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

- 薬剤はスミチオン乳剤2,000倍液、ベストガード水溶剤2,000倍液などを散布する。

4 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 5月下旬現在、イチゴ育苗床におけるハダニ類の発生量は平年並である。

イ 向こう1か月の気象予報によると、今後も平年並の発生量が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

ア ハダニ類の発生源となる畦畔雑草に対し、ハービー液剤200倍液を散布するなど除草に努める。

イ 発生初期にニッソラン水和剤2,000~3,000倍液、オサダンフロアブル2,000倍液などを散布する。発生量がやや多い場合は、コテツフロアブル2,000倍液、コロマイト乳剤1,000~1,500倍液(親株床での登録)などを散布する。

[ネギ]

1 さび病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 5月下旬現在、定点調査ほ場における本ほの夏ネギ、秋冬ネギにおける発病は、ほぼ平年並であるが、多発生ほ場が散見される。

イ 本病は比較的低温で降雨が多い場合、発病が助長される。向こう1か月の気象予報によると、今後平年並の発生が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 6月に収穫する作型で、すでに発病の多いほ場では、アミスター20フロアブル2,000倍液を散布する。

イ 7月以降に収穫する作型では、6月上旬から、オンリーワンフロアブル1,000倍液、ラリー乳剤4,000倍液などを散布する。発病が増加する場合は、これらの薬剤にカリグリーンの800倍液を混用して散布する。

2 黒斑病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 5月下旬現在、定点調査ほ場における発病は平年並である。

イ 本病は気温が25前後で、降雨が多い場合、発病が助長される。向こう1か月の気象予報によると、今後平年並の発生が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 根傷み、肥料不足となると発病しやすいので、ほ場の排水を図り、肥培管理に注意する。

イ 薬剤は、ダコニール1000の1,000倍液、ポリベリン水和剤1,500倍液などを予防散布する。発病後は、ロブラール水和剤1,000~1,500倍液などを散布する。

3 ネギハモグリバエ

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 5月下旬現在、県予察ほ場（北栄町）における発生時期及び発生量は平年並である。

イ 現地ほ場での発生量は平年並である。

ウ 向こう1か月の気象予報によると、今後も平年並の発生量が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

定植時には、ベストガード粒剤の6 kg/10a 植溝処理土壌混和や、アクタラ粒剤5の6～9 kg/10a 作条混和、アドバンテ-ジ粒剤の3～6 kg/10a 作条処理土壌混和などを行う。粒剤の効果が切れた後は、アグロスリン乳剤2,000倍液などを散布する。

4 ネギアザミウマ

(1) 予報の内容

発生時期 やや早い

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 5月下旬現在、現地ほ場（米子地区）での発生量はやや多く、一部で多発ほ場も見受けられる。

イ 向こう1か月の気象予報によると、今後もやや多い発生量が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

定植時の粒剤処理は、ネギハモグリバエの項参照。粒剤の効果が切れた後は、マラバッサ乳剤800～1,000倍液、アグロスリン乳剤2,000倍液、アクタラ顆粒水溶剤1,000～2,000倍などを7～10日おきに散布する。なお、同一薬剤の連用は効果が低下する恐れがあるので避ける。

[ブロッコリー]

1 コナガ

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 県予察ほ場（北栄町）における本虫の発生時期及び発生量は平年並である。

イ 6月上旬現在、現地ほ場における幼虫の発生数は平年並となっている。

ウ 向こう1か月の気象予報によると、今後も平年並の発生量が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

6月中旬以降収穫のブロッコリーで幼虫の発生がみられる場合、ノーモルト乳剤2,000倍液、モスピラン水溶剤2,000倍液などを7～10日おきに散布する。なお、防除にあたっては、薬液が葉裏にも十分かかるよう丁寧に散布する。

[シバ]

1 葉腐病（ラージパッチ）

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 5月下旬現在、定点調査ほ場において本病の発生はほとんどみられない。

イ 本病は降雨によって発病が助長される。向こう1か月の気象予報によると、今後平年並の発生が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 本病の発生前にセレンターフ顆粒水和剤0.5gを0.5L/m²散布する。

イ すでにパッチがみられる場合は、発病部位を中心にグランサー水和剤500倍液0.5L/m²、バリダシン液剤5の500倍液0.5~1L/m²などをスポット散布する。

[おしらせ]

農薬は、農林水産省の登録番号のあるものを、ラベルをよく読んで使いましょう。
詳しい内容は、独立行政法人 農林水産消費安全技術センターの「農薬登録情報検索システム」から検索できます。(<http://www.famic.go.jp/>)

**農薬の使用に当たっては、農薬使用基準を遵守するとともに、
周辺への飛散には十分注意しましょう。**

< 鳥取県病虫害防除所ホームページ >

アドレス <http://www.jppn.ne.jp/tottori/>

病虫害の発生予察情報やフェロモントラップ調査結果（野菜の各種害虫、果樹のシンクイムシ類）、病虫害の診断方法などの情報をお知らせしていますので、ご利用下さい。

鳥取県病虫害防除所

〒680-1142 鳥取市橋本 260

TEL : 0857-53-1345、FAX : 0857-53-5647

E-mail : boujyot@titan.ocn.ne.jp

次回の予報発表は、7月5日（木）の予定です。